# かめきち探険隊

佐藤寛子

クラスで飼っていた亀がいなくなった。

保育中、T夫とK夫が亀を砂場に連れ出し、砂まみれにして遊んでいたので、

「かめきちはね、お砂は嫌いなのよ」

と声をかけ、水を張ったたらいを用意した。T夫は、亀が休めるようにと、煉瓦をその中に入れ、K夫は砂まみれの亀を、そっとたらいに逃がした。二人の様子を見、亀が気持ちよさそうにたらいの中で歩き出すのを確認すると、私は安心して、それっきりそのことをすっかり忘れてしまった。

降園時間が近づき、片付けが済んで、子どもたちが席に着き始めた頃、ふと水槽に目をやった。

――いない……――

慌てる私の様子に気付いて、子どもたちが

「せんせい、どうしたの?」

と、口々に声をかけてくる。

「ごめんね。かめきちがいなくなっちゃったから、さがしてきます。みんなは、おかえりの支度をして待って

てね」

四歳児の六月。

園の生活に慣れてきた子どもたちは、それぞれに自分らしさを出し始めていた。私の話を素直に聞き、身支度を済ませ、おとなしく保育室で待っていてくれるはず……などなかった。

大急ぎで靴を履き替え園庭に出る私の後から、ぞろぞろとクラスの半数の子どもたちがついてきた。残りの半数の子どもたちは、入り口のドアや窓から身を乗り出して、その様子を見ている。

「いっしょにさがそうぜ！」

「がんばってねえ～」

など、このクラス、こんなにまとまっていたかしら？と、私は自分の目と耳を疑った。

小さな亀を探すには、園庭は広すぎた。

「かめきち～どこにいるの～？」

と、草をかき分け、プランターや大きな石を動かしてさがし回った。必死な私の形相に、最初はなんだか嬉しそうに飛び跳ねていた子どもたちも、本来の目的に気付いた様子。

「かめきち～」と呼びながら、一生懸命さがし始めた。

「せんせーい！　いたよー！」

T子の大きな声に、

「どこどこ？」

と、みんなで駆け寄る。

「ほらね」

T子の指さす方を見ると、なんと大きな石。

「かめきちに似てるでしょ？」

真剣なT子の表情もさることながら、

「ほんとうだ。そっくりだ。」

「かめきちなんじゃない？」

と、周りの子どもたちも真剣そのもの。

――う～ん。似てるけど、それはやっぱり石だと思うよ――

そんなこんなで、大騒ぎしながらさがし回ったが、

結局その日は見つからなかった。

翌日。

おはようの挨拶もそこそこに、S夫は水槽に駆け寄った。空っぽの水槽を見て、

「やっぱり、かえってこなかったか……」

と、つぶやいている。

「せんせい、かめきち、やっぱり見つからなかったんですね」

H夫の母が話しかけてきた。

四月に入り、担任が替わったことを、まだ受け入れてくれない様子があったH夫は、私には必要最低限のことしか話さないでいた。

かめきちの話題が食卓にのぼったのだろうか？

ちょっぴり嬉しかった。

「せんせい、きょうもさがしに行こう！」

数人の子どもたちに交ざって、H夫の姿が見えた。張り切って園庭に出る。

「かめきち～。出ておいで～」

みんなで声を合わせて練り歩く。

「ちょっとまって！」

K夫は、額にうっすら汗をにじませながら、みんなを呼び止めた。

「かめきちは、耳がないんじゃないか？」

周りの子どもたちが、ふと黙り込んだ。何やら考えている様子。いつの間にか、加わっていた隣のクラスのH子が、

「あるよ。あるけど、ちっちゃいんじゃない？」

と、言う。すると、H夫が、

「そうだよ。人間には見えないんだ」

と、はっきり言った。K夫は、

「だったら、ちっちゃい耳でも聞こえるように、呼ばないと！」

と、提案。

「そうだそうだ！」

「みんなでいっしょに呼ぼうよ」
「せ〜のっ」
「か・め・き・ち〜」

その日のおかえりは、かめきちの話題でもちきりだった。かめきちが、自分で帰って来たくなったときのために、地図を書くことになった。クラスがわかるように、入り口に飾りを付けることも決定。

今日一日、保育室にこもって、何やら作っていたY夫は、みんなに見て欲しいといって、画用紙で作った亀を自分の引き出しから出してきた。顔と手足、しっぽを折り曲げると甲羅に隠れて見えなくなる様子を実演してみせた。

「すごいねぇ〜」と声があがる。

「あしたもさがそう！」

子どもたちの降園後、私は、画用紙でかめきちバッジを作った。自分の不注意で亀を逃がしてしまったことへの、子どもたちとかめきちへのお詫びの気持ちである。

翌々日から、園章の隣に、かめきちバッジをつけた子どもたちが、自主的にかめきちさがしに出発。かめきち失踪のうわさは、あっという間に幼稚園中に広がり、三歳児の保護者から、亀は赤が好きだという情報をもらった。早速赤い紙を園庭に置いてみたりした。

子どもたちも私も、いつの間にか自分たちを「かめきち探険隊」と呼ぶようになっていた。探険隊のバッジに憧れたのか、隣のクラスで、偽造バッジ（子どもの手で、本当にかわいらしい亀が描かれている）までもが登場。

亀の足跡を見つけたと言って、地面のリヤカーのタイヤの跡を追う子どもたちもあった。タイヤの跡が消えたところを必死にシャベルで掘っている。どうやら亀は土の中で冬眠することを図鑑で調べてきたようだ。

季節は夏。かめきちが土の中にいるはずはない。け

れど、子どもたちの真剣な様子を見ながら、私までも、まるでそこからかめきちが出てくるのではないかと、そんな気持ちになった。

かめきちが無事にクラスに戻ることをどんなに願ったことだろう。しかし残念なことに、今もまだ見つかっていない。その後も、かめきちバッジをずっと園章の隣につけて登園してくる子どもたちがあったが、かめきちさがしは、少しずつ下火になっていった。

けれど、この一件があって、クラスの雰囲気は大きく変わったように思う。

*

四月に初めて受け持ったとき、子どもたちはみなそれぞれに戸惑いを見せていた。

三歳児クラスで自分の先生だった人が、四月に登園してみたら、隣のクラスの先生になっていたH夫は、まるで、捨てられてしまったかのように、切ない表情を見せていた。Y夫やT子は、今は別の幼稚園に行ってしまってここにはいないE先生との思い出を再現するかのように、黙々と製作に励んだ。他の幼稚園から入園してきた子どもたちは、自分の居場所が見つからず、堅い表情のまま立ちすくんでいたり、私に必死にしがみついたりしながら、環境の変化を受け止めようとしていた。

慣れ親しんだ人、場所、時間との突然の別れ。子どもたちは予期しなかった別れをそれぞれに経験してきていた。

かめきちの失踪は、当たり前にそこにいると思っていたものが突然いなくなる出来事だった。いなくなったかめきちをさがすことで、みんなの気持ちが一つになったのは、そうした「別れ」をそれぞれに経験したもの同士だったからかもしれない。そして、そんな子どもたちが生きる「四歳の今」は、経験を通して、考えたり感じたりしながら、遊びを創り出していく楽し

さを知り始める時なのかもしれない。

子どもたちは、私よりも数倍かめきちさがしを楽しんでいた。石を見ては「かめきちじゃない？」と言い、「絶対にここにいるよ」と言っては地面を掘り続けた。「いたいた！」と言って、五歳児の保育室に行き、前から飼われていた亀を「これは、かめきちだ！」と主張し、困った五歳児が、「これは、山の組の亀だよ」と諭す場面もあった。

子どもたちは、かめきちさがしをしながら、自分たちの保育室から、他のクラス、遊戯室、園庭、園庭の奥の高台……と、どんどん生活の空間を拡げていった。そして、それと同時に、担任との関係から一歩を踏み出し、クラスの友だちと思いを共有する楽しさをあじわいながら、行く先々で三歳児、五歳児、他のクラスの教師と出会い、関りを拡げていった。

子どもたちの姿を見ながら、実感したことがある。「別れ」はおしまいではなく、次の出会いへとつながっているのだということ。

新しい出会いは、生きる上での大きなエネルギーになること。

こうしたことは、子どもたちは全部承知のことかもしれない。子どもたちは、大人よりも、自分の予期せぬところで環境が変わる経験を生活の中でたくさんしている。そして、それを柔軟に受け止める術をちゃんとからだにもっている。

あとは、かめきちの幸せを祈るだけだ。

「（大学構内の）図書館前の池に亀がいるじゃない？あの中にかめきちもいるわよ」

かめきちを案じる私に、ある先生が声をかけてくれた。職員室での会話がどうぞ現実になりますように……。

子どもたちを誘って、散歩がてら見に行ってみようか……。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）